



ROTARY CLUB OF NAGOYA MEINAN

URL <http://www.meinan-rotary.com>

E-mail info@meinan-rotary.com

WEEKLY REPORT



2008-2009 RI会長
リー・ドンカン氏(韓国)

■承認/1991年3月8日

■例会日/火曜日・PM6:30

■例会場/名古屋マリオットアソシアホテル

■事務局/〒450-6002 名古屋市中村区名駅1丁目1番4号

名古屋マリオットアソシアホテル2202号

TEL.052-586-2043 FAX.052-586-2054

■会長/川辺 清次

■幹事/鈴木 清詞

■会報委員長/田中 省三

職場例会

於：中部国際空港セントレア

第 838 回

2008年11月7日(金) 曇り 第17回

～ロータリー財団月間・世界インターアクト週間～

出席 会員 70 名 (出席率算入人数 63 名)
出席 32 名 出席率 50.79%
前々回補填率 93.85% (10月21日分)

◆海上保安庁 セントレア庁舎 見学◆

●中部空港海上保安航空基地 基地長 南 隆男さん

海上保安庁は自衛隊ではなく警察機関です。日本の経済を支える海外からの物資を運んでくる船舶の安全を図る、そして経済活動を円滑にできるようにすることが、我々海上保安庁の大きな仕事であります。海上保安庁の職員は1万3,000人しかおりません。そういう人数の少ないところで、海の警察、消防という仕事をやるので、1人の職員がいろいろなことをやらなければなりません。



海上保安庁は、まず警察官であります。人が助けを求めていけば助けにいかねばならない。それから、船が安全に仕事をするための海の海図の作成もします。日本国のテリトリー、大陸棚はどれだけの大きさがあるのかを、海洋情報部が数年にわたって調査しております。また、船が安全に走れるように道しるべとなることもあります。伊勢湾には、名古屋港と伊良湖岬に海上交通センターがあり、船舶交通の状況を常に監視して、船舶が安全に通行できるようにアドバイスをすることもしております。

また、「巡視船」という船を持っておりますけれども、その乗組員は一人で何役もやっております。ドラマ「海猿」では、ひたすらレスキューばかりやってるようですが、ドラマの主人公も本来は船の一乗組員であるわけです。巡視船を運航するために舵をとったり、機関の整備をしたり、あるいは乗組員の食事の支度をしたり、それぞれ専門の分野をやりつつ、そういう事案があった時には海猿に変身して救助活動等々を行うということです。何でもこなさなければならないというのが、我々海上保安官の宿命です。

海上保安官になるための教育機関には、海上保安大学校と、海上保安学校があります。学校には分校もございます。高校卒業以上あるいは見込みの方に選抜試験を受けていただきます。大学校は広島県の呉にあり、卒業ま

で2年6か月、最後の6か月は練習船に乗って航海です。それから現場に出るまでの準備教育を行い、これを終えますと初級幹部として現場に配置されます。海上保安学校は、1年または2年の教育期間で、一般職員を養成する機関です。基本的に、巡視船の乗組員者は船舶運行システム過程に入り、巡視船の運航に携わるための勉強と、法律の勉強を行います。情報システム過程は航行援助関係です。海洋科学過程は、海の計測をし、いろんな資料を提供するための過程です。それから航空過程もございます。これは航空機の搭乗員を養成する課程です。分校は船舶や航空機の運行をするための資格を持っている方々が、海上保安官になりたいという場合に、6か月の教育を受けて海上保安官になるというコースです。

当基地に配備されております航空機の搭乗員については、いったん初期の教育を受けまして、防衛庁への委託研究とか、海上保安学校の航空の分校に再度入って、一番ベーシックな機械の資格を取るという形になります。

中部国際空港がオープンしたときに、この基地を造るための布石ということで、名古屋海上保安部の出先機関として、常滑海上保安所を発足させました。これが平成16年4月1日です。名古屋管区海上保安部には、航空基地として三重県伊勢市の明野に航空機を運用する伊勢航空基地がありました。その航空基地と、巡視船を配備して海上保安業務を行う海上保安部の海上保安所、これら一つにまとめて中部空港海上保安航空基地を造ったわけです。これまで航空基地は部署の要請に応じて仕事をしていましたが、一つの部署で船艇と航空機を持って、海空一体となって海上保安業務をやるということ



で、有機的に迅速に対応できるシステムを目指しているところです。

第840回例会(11月18日)のご案内

地区大会報告

講演

セントレアホール

●第四管区海上保安部海洋情報部

海洋調査課長 細萱 泉さん

海上保安庁では海の地形を調べて、その情報をもとに、津波のシミュレーション、地震の計算などをして皆さんの役に立っております。



地球の表面は十数枚程度のプレートで覆われています。「海のプレート」と「陸のプレート」があり、海のプレートのほうが陸のプレートより若干重く、陸のプレートは浮き上がっています。年間5cmとか10cmの非常に遅いスピードでプレートは動いていますが、100万年、1000万年といった年月がたてば、太平洋を横断するくらいの長さになります。

地震は世界中どこでも起きるわけではなく、海のプレートと陸のプレートの境界面で起きます。平成16年のスマトラ沖地震も、プレートの境界面で起こっています。日本列島で地震が多いのは、ちょうどプレートの境界面があるからです。こういった地震は、海溝型地震とプレート間地震に分けることができます。もう一つ、陸のプレートの中にたまるひずみによって起こる地震もあります。活断層による地震です。200万年ぐらい前の地質時代に活発に活動して、今後も活動するであろう、動くであろう、そういった断層を活断層と言っております。

世界における地震の1割が日本列島に集中するのはなぜかという、海のプレートである太平洋プレートが三陸沖で大体年間10cm、伊豆諸島のほうで大体年間5cmぐらいの速度で、日本列島を押しているからです。もう一つ、フィリピン海プレートが大体年間5cmぐらいのスピードで南西諸島のほうを押しています。陸のプレートは北米プレートとユーラシアプレートで、この中に太平洋プレートとフィリピン海プレートが潜り込んでいます。こういった境界面で起きるものを海溝型地震といいます。東海地震、東南海・南海地震などは海溝型地震で、大体100年から150年ぐらいの間隔で起きます。

活断層は、日本列島と周辺の海底を含めて、約2,000あると言われていています。地震調査研究推進本部では重要視しなければいけない活断層として96本を定め、それについて評価しています。活断層は地震の発生間隔が数千年から数万年なので、一度起きると、次にいつ起きるか分かりません。

東海・東南海・南海地震は100年から150年の発生パターンで起きています。東海地震、東南海地震、南海地震はそれぞれ震源地が違うものとして区別しているのですが、単独で発生せず、3つまたは2つ連続で起きています。安政東海地震のときは、東海の震源地と、東南海の震源地が一緒で、「安政東海地震」となりました。そのわずか32時間後に安政南海地震が発生しました。最近では、昭和東南海地震が1944年（昭和19年）に発生したわずか2年後、昭和21年に昭和南海地震が発生し

ております。安政東海地震から今年の2008年1月1日現在で154年間、地震が起きていないので「東海地震が起きる」とされているのです。

地震波はいろいろありますが、大きなものでは秒速約6kmの縦波（P波）、秒速約4.5kmの横波（S波）があります。昨年の10月1日から気象庁が運用している地震速報では、地震波の到達する時間差を利用して緊急地震速報に応用しています。

津波はいろいろな原因で起きるのですが、海の底で地震が起きると地盤が変動して津波が起きます。津波の特徴で覚えておいていただきたいのは、潜水効果です。津波は深いところでは速く、沿岸部に近づいて浅くなると遅くなるという特徴があり、遅くなると津波のエネルギーは上にいくのです。平成16年10月26日のスマトラ沖地震で起きた津波では、被災地がリゾート地でホームビデオカメラを持っている人が多かったため、潜水効果がよく分かる記録が残りました。学者にとって貴重な資料になっています。

日本では地震が起きると、全国66の予報区に分けて、津波注意報・津波警報を出しています。気象庁では、地震が起きてから大体3分ぐらいで、津波注意報・警報を出しています。津波がなければ、安全情報として「津波はありません」というものを出しています。

気象庁はデータ予測という手法を取っております。全国に約4,000の地震計がありまして、地震が起きると大体数秒の間に震源地の深さが分かりますので、過去の約10万のデータの中の一番近いものから、近似値で津波の予測をしています。陸上には、国土地理院、気象庁、防災科学技術研究所、自治体の約4,000個の地震計が配置されています。また、国土地理院は全国に20km間隔で約1,200個の電子基準点を整備しており、電子基準点を利用して、地震の基礎調査として、地盤がどれぐらい動いたか調査しています。ですが、海底は音波しか使えませんが、やり方としてはケーブルです。地上から沖合何キロかに設置した海底地震計の情報をケーブルで伝えています。



今、海上保安庁では、海底の地殻変動を観測するため、三陸沖から四国沖まで、海底基準局を整備しています。船から海底基準局に音波を飛ばして、そのデータからGPSで位置を調べて、海底基準局の移動を調べるというものです。ただ、海中の観測網はまだ16点ぐらいです。大学の研究機関なども入れているのですが、陸上の観測点に比べると、まだまだという状況です。

海溝型地震は100年から150年で起きるといことです。今日起きてもおかしくないし、30年後でもおかしくないということです。こういった地震がきて、こういった津波がくるということをご参考にしていただければよろしいかと思います。

◆クィーンアリス(昼食)◆

